

幼児の発話における脱文脈度の年齢による特徴 —クリスマスの朝の会話の分析から—

田中 弥生 田中 真理子 小磯 花絵
国立国語研究所
{yayoi,tmariko,koiso}@ninjal.ac.jp

概要

子どもは自分自身やその時その場のこと（低脱文脈度）から話し始め、年齢や就学に伴って一般的・抽象的な脱文脈度の高いことも表現できるようになるとされる。本発表では脱文脈度の年齢との関連の解明を目的に、数年に渡るクリスマスの朝の親子の会話を対象として、修辞機能分析の分類法を用いて就学前の幼児の発話の修辞機能と脱文脈度を確認した。分析の結果、クリスマスの朝の場面においては、目の前のことについて述べる、脱文脈度の低いものから中程度の表現が典型的と考えられること、3歳では直接的な要求が見られる一方、脱文脈度の高い表現も用いていること、5歳6歳はほぼ同様の傾向が見られることが明らかになった。

1 はじめに

「文脈」や「脱文脈化」は研究分野によって異なる意味で用いられる語であるが、本研究では、発話内容や表現がコミュニケーションの場「いま・ここ・わたし」に依存している場合に「文脈化している」「脱文脈度が低い」と捉え、発話の場に依存しない、一般的・抽象的な場合に「脱文脈度が高い」とする。同じ時空にいる相手への「この箱開けて」と行動を促す直接的な表現や、「僕うれしいな」や「この箱開かない」のような自分の感情やその場のことを表現する発話は脱文脈度が低く、「おじいちゃんがこの箱をプレゼントしてくれた」というその場にはいない人についての発話や、「新幹線は速いんだよ」のような一般的な内容は、脱文脈度が高い。

談話分析手法の一つに、脱文脈度の観点による「修辞機能分析」の分類法 [1] がある¹⁾。メッセージという分析単位（概ね節に相当）ごとに、発話機能、

および主語や主題（空間的距離）と述部の時制（時間的距離）の分類の組み合わせから修辞機能と脱文脈化指数が特定される。

子どもは自分のことやその時その場に関する脱文脈度の低いことから話せるようになり、年齢や就学に伴って、過去や未来のこと、その場にはいない人のことなども表現できるようになっていくとされる [6, 7]。これまで修辞機能分析の分類法を用いた分析によって、親子の会話で2歳児が脱文脈度の低い話題には参加するが脱文脈度の高い話題では参加しない様子が観察され [8]、親子の会話と親戚を交えた会話の比較から、大人が用いている脱文脈度の影響や話題内容による特徴がうかがえることなどが明らかになっている [9]。また児童作文では話題や学年によって用いられる脱文脈度に特徴があることが確認されている [10]。

本稿の目的は、脱文脈度が年齢とどのようにかわるかを明らかにすることである。現在国立国語研究所で構築中の『子ども版日本語日常会話コーパス』(CEJC-Child) [11] では、幼児を含む会話が1年から5年程度の期間収録されており、調査協力世帯によって数年に渡る変化や特徴を確認することが可能である。上述のように脱文脈度は話題によって特徴が異なる可能性があるため、クリスマスの朝という、話題が統一されることが期待される場面の数年に渡る家族での会話を修辞機能分析の分類法によって分析し、年齢による修辞機能と脱文脈度の特徴を確認する。

2 分析方法

2.1 分析データ

『子ども版日本語日常会話コーパス』(CEJC-Child) は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」

1) 選択体系機能言語理論の枠組みの英語談話分析手法である Rhetorical Unit Analysis [2, 3] を日本語に適用した修辞ユニット分析 [4, 5] を日本語文法の枠組みで修正している。

(2022～2027年度)にて現在構築中で、2025年にモニター版を公開している。日常生活の中で生じる子どもを含むコミュニケーション場面を扱った音声・映像付きコーパスであり、本研究では自宅での兄弟(長男かい3歳11ヶ月から6歳11ヶ月、次男ゆいと1歳1ヶ月から4歳1ヶ月、いずれも仮名)と保護者による、4回のクリスマスの朝のやりとりのデータから長男の発話を分析対象とする(会話ID Y010_007 約18分, Y010_034 約22分, Y010_064 約16分, Y010_091 約9分(aとb²⁾の合計)。

2.2 修辞機能分析の分類法

修辞機能分析の分析単位であるメッセージは概ね節に相当する³⁾。メッセージは「定型句類」(相槌, 挨拶, 定型句, フィラー, 節の形でないものなど), 「主節」(単文, 及び主節), 「並列」(従属度の低い従属節), 「従属」(従属度の高い従属節), 「引用」(“と思う”などで引用されている部分)に分類し, 「主節」「並列」「引用」について, 発話機能・空間要素・時間要素を分類し, 表1に示したように, これらの組み合わせから修辞機能と脱文脈化指数が特定される。

表1 発話機能・空間要素・時間要素からの修辞機能と脱文脈化指数の特定

定義	↑ 高空間的距離のレベル ↓ 低										一般化 14	
状況外	報告 09		状況外 回想 10	予測 11		推量 12		説明 13				
状況内	実況 02		状況内 回想 03	状況内予想 05		状況内 推測 06		観測 08				
参加	行動 01			計画 04					自己記述 07			
空間要素	← 低 ← 時間的距離のレベル → 高 →											
時間要素		現在	過去	未来 意志的	未来 非意志的	仮定		習慣 ・恒久				
発話機能	提言		命題									

【行動】<01>がもっとも文脈(コミュニケーションの場「いま・ここ・わたし」)に依存した(脱文脈度の低い)表現で, 【一般化】<14>がもっとも脱文脈度の高い表現である⁴⁾。

発話機能は「提言」か「命題」に分類する。「提言」は, 品物・行為の交換に関する提供・命令で, 基本的には同じ時空にいる相手への働きかけや, 会話者同士の行為にかかわる発話内容が該当し, 【行

2) 元は一つのファイルであったものを分割してコーパスに格納している場合に枝番が付与されている。
3) 連体修飾節は独立したメッセージとして扱わない。
4) 本文では修辞機能を【】で, 脱文脈化指数を<>で示す。

動】<01>と特定される。一方「命題」は情報を交換する陳述・質問で, 分類した空間要素と時間要素の組み合わせによって修辞機能と脱文脈化指数が特定される。

空間要素は, 話者のいる場所「ここ・わたし」を基準として, 主語, 主題, 述部の主体との空間的距離を示す要素で, 「参加」「状況内」「状況外」「定義」に分類する。

時間要素は, 話者のいる時間「いま」を基準として, メッセージで表現されている出来事がいつ起こったかを示す要素である。基本的にテンスや時間を表す副詞などによって表現され, 「現在」「過去」「未来意志的」「未来非意志的」「仮定」「習慣・恒久」⁵⁾に分類する。

以下に分類例を示す。(1)は発話機能が「提言」のため, 修辞機能【行動】<01>と特定される。(2)は発話機能が「命題」, 空間要素部分が「僕」で空間要素「参加」, 時間要素部分が「開ける」で時間要素「現在」に分類され, この組み合わせから【実況】<02>と特定される。

- (1)これ開けて。(提言→【行動】<01>)
- (2)僕開ける。(命題&参加(僕)&現在(開ける)→【実況】<02>)
- (3)この箱開かない。(命題&状況内(この箱)&現在(開かない)→【実況】<02>)
- (4)パパは新幹線好き?(命題&参加(パパは)&習慣・恒久(好き)→【自己記述】<07>)
- (5)この箱きれいだね。(命題&状況内(この箱)&習慣・恒久(きれいだね)→【観測】<08>)
- (6)去年おじいちゃんがこの箱をくれた。(命題&状況外(おじいちゃんが)&過去(去年・くれた)→【状況外回想】<10>)
- (7)おばあちゃんは毎朝お散歩してる。(命題&状況外(おばあちゃんは)&習慣・恒久(毎朝お散歩してる)→【説明】<13>)
- (8)新幹線は速いんだ。(命題&状況外(新幹線は)&習慣・恒久(速いんだ)→【説明】<13>)

3 分析結果

表2と図1に各年齢における長男かいの発話の修辞機能と脱文脈化指数の出現の結果を示す。

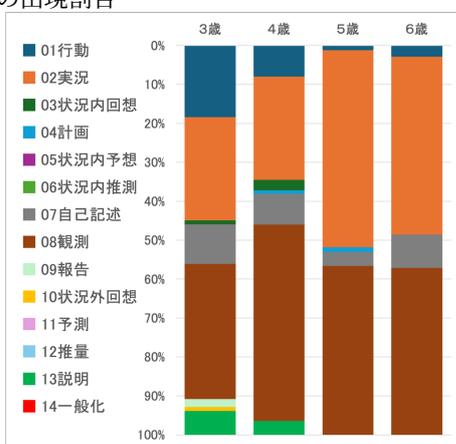
図1の割合をみると, いずれの年齢でも【実況】<02>と【観測】<08>が多く, 【自己記述】<07>も使

5) 「習慣・恒久」には, 属性, 嗜好, 評価も含む。

表2 長男の年齢ごとの発話における修辞機能と脱文脈化指数の出現頻度

	3歳	4歳	5歳	6歳
01 行動	18	9	1	1
02 実況	26	30	42	16
03 状況内回想	1	3	0	0
04 計画	0	1	1	0
05 状況内予想	0	0	1	0
06 状況内推測	0	0	0	0
07 自己記述	10	9	3	3
08 観測	34	57	36	15
09 報告	2	0	0	0
10 状況外回想	1	0	0	0
11 予測	0	0	0	0
12 推量	0	0	0	0
13 説明	6	4	0	0
14 一般化	0	0	0	0
	98	113	83	55

図1 長男の年齢ごとの発話における修辞機能と脱文脈化指数の出現割合



用されている。年齢の比較をすると、3歳では【行動】<01>と【説明】<13>が多いことが特徴的で、4歳では【観測】<08>の割合が高く、5歳と6歳は修辞機能の出現は似た傾向にある。以下に修辞機能ごとの発話例を示す。

まず【行動】<01>の発話である。(9)は、包みを開けることを求めており、(10)は、電車のおもちゃを連結したのを見せるため、いずれも幼児が保護者に行動を要求する【行動】<01>の典型的な発話と言えるだろう。(11)は弟に自分の電車のおもちゃを渡しながらかの発話で、遊んでいいよということを伝えるため繰り返されている。(12)は包装紙についていたテープを持ってもらうため、(13)はおもちゃの使い方を自分で確認したく、母が説明書を読んでいるのを遮っている⁶⁾。(14)は弟がもらったぬいぐるみを母に触ってみるように勧めている。

6) 「待つ」はフィルター的な使い方をされていることがあり、その場合はメッセージの種類を「定型句類」に分類した。

- (9)ちょっと開けてよ。(3歳 Y010_007 1345.47)⁷⁾
- (10)見て。(3歳 Y010_007 756.11)
- (11)遊んで。(3歳 Y010_007 790.151)
- (12)ちょっと持って。(4歳 Y010_034 319.49)
- (13)ちょっと待って。(5歳 Y010_064 662.025)
- (14)触ってみて。(6歳 Y010_091b 92.262)

次に【実況】<02>の発話例を示す。(15)は、固くて取れなかったリボンを自分で取れたときの発話である。(16)は、電車のプレゼントの音が鳴る部分のスイッチがオフになっていることを母に説明している。(17)はプレゼントの電車に単三電池が必要で、父に確認している。(18)は、クリスマスプレゼントを一緒に開けたいのに弟が起きてくれないことを母に伝えている。これらは、その時の気持ちやその場の状況を述べている。

- (15)(φ=僕はリボンを)取れた。(3歳 107.686)⁸⁾⁹⁾
- (16)ここ今(φ=スイッチが)オフになってますから。(4歳 472.377)
- (17)単三電池ない?(5歳 687.918)
- (18)(φ=ゆっちゃんが)起きてくれないんだよ。(6歳 a 55.374)

以下は【自己記述】<07>の例である。(19)は、もらった電車のおもちゃで遊んでいたときに近くにきた弟にそのおもちゃを差し出しながらかの発話である。(20)は、祖父からのプレゼントの箱を手にしたながらかの発話で、(21)は、他のおもちゃを期待していたが、プレゼントがプラレールだったことについての発話である。(22)は、起きてきた弟にプレゼントを示しながら話しかけている。これらは自分や会話の相手についてその感情や性質を述べている。

- (19)(φ=ゆっちゃん)はこれ遊んでいいよ。(3歳 785.981)
- (20)あったら(φ=僕は)Nゲージがいいな。(4歳 895.681)
- (21)(φ=僕は)プラレールもほしかったから。(5歳 73.34)
- (22)(φ=ゆっちゃん)は開けるの難しい?。(6歳 b 22.77)

【観測】<08>の例を示す。(23)(24)(25)は、いずれももらった電車のおもちゃを見ての発話で、(26)は、起きてきた弟にプレゼントを示し、(27)は弟の

7) 括弧内に年齢と会話IDとその発話の開始時間を示す。
8) 要素を推測して復元した場合φで示す。
9) 以下、会話IDを省略する。ただしY010_091はaあるいはbのみ示す。

プレゼントを触っての発話である。これらはその場の状況やその場にあるものの性質を述べている。

- (23) ちょっと真ん中かっこいいっすね。(3歳 432.418)
(24) もうここがスイッチなんです。(4歳 1263.736)
(25) これさ はやぶさ俺ほしかったやつ。(5歳 621.293)
(26) ゆっちゃんのはこれだね。(6歳 b 18.594)
(27) (φ = これは) めっちゃふわふわ。(6歳 b 86.715)

【説明】 <13>の例を示す。(28)は、クリスマスの靴下の袋にぴったり入っているプレゼントを取り出せるか父に聞かれた長男の返答である。長男自身ができるかの質問に対して、「子どもは」という抽象化した表現を用いている。(29)は、いい子にするのを頑張ったからサンタさんがプレゼントをもってきてくれた、という趣旨のことを母が述べたのに対する発話で、このあと、いつもたいちゃんは給食の時に先生に怒られているという説明が続く。(30)は、プレゼントにもらった電車と祖父の家にある電車は形式が違うことを説明している。これらは、その場がないものや人の状況や性質について述べている。

- (28) だからね 全然子どもはね 取り出せないの。(3歳 70.182)
(29) (φ = サンタさんは) たいちゃんには来ないね。(3歳 923.146)
(30) おじいちゃんちにあるやつは爪があるんだよ。(4歳 730.32)

4 考察

いずれの年齢でも多く見られた【実況】<02>と【観測】<08>は、プレゼントがあるのを見つけ、プレゼントの包装を開けて確認するというクリスマスの朝の場面における典型的な表現であろう。そのため、年齢によらず用いられていると考えられる。

最も脱文脈度の低い【行動】<01>は、相手に行動やものを要求したり提供する修辭機能である。幼児に特徴的と考えられる、自分でできないときに保護者などに要求する「開けて」「取って」や、注意を得たいときの「見て」などは、3歳4歳で見られた。しかし、本分析対象の3歳の発話では、弟に自分のおもちゃを渡して遊ばせてあげるために「遊んで」を数回繰り返すなど、保護者に要求する以外のものも見られた。5歳6歳で【行動】<01>が見られなかつ

たのは、包みを自分で開けるなど、保護者の助けがなくてもできるが増えている可能性があるだろう。本分析対象の6歳では、弟をプレゼントがあるところまで連れて行き「ゆっちゃんのはこれだね」(【観測】<08>)、「開けるの難しい？」(【自己記述】<07>)と包みを開けてあげようとするもののうまく開けられず、「どう開けるんだ。」(【観測】<08>)、「いや、これさもう上に引っ張っちゃったらい？」(【観測】<08>)と母に質問して、母が「できる？お母さんやろっか？」と提案したところで「うん」と母にゆだねている。このように、保護者に直接要求するのではなく弟を支援する様子が低年齢には見られなかったことであり、また、保護者が支援を申し出るために、子どもからは直接的要求(【行動】<01>)が生じないこともあるだろう。脱文脈度の高い【説明】<13>は3歳4歳で用いられ、5歳6歳では出現していないが、低年齢でも脱文脈度の高い表現が用いられることが明らかになるとともに、その場面に典型的と考えられる修辭機能の他には、発話者の気分やその時々状況によってさまざまな修辭機能が用いられる可能性があることを示すと考えられる。

5 まとめ

本発表では、就学前の幼児の発話における脱文脈度が年齢とどのようにかわるかを明らかにするため、数年にわたるクリスマスの朝という同一場面における親子の会話を修辭機能分析の分類法によって分析し、修辭機能と脱文脈度の様子を確認した。分析の結果、クリスマスの朝であるために共通すると考えられる修辭機能が用いられていることが明らかになり、低年齢での脱文脈度の低い表現の出現と年齢の上昇による変化の可能性がうかがえた。

今後の課題としては、現在進めている修辭機能分析のアノテーションをさらに進展させ、その完成によって、中長期にわたる子どもの発話における脱文脈度の変化を分析できるようにすることが挙げられる。その一つとして、本発表では就学前のみを対象としたが、就学後の収録も継続しているため、就学前と就学後の特徴を比較・分析することが可能になると考えられる。さらに、複数の場面における発話を対象とした分析を行うことで、場面と修辭機能との関係を総合的に明らかにし、また親の働きかけや兄弟との関わりとの関連についても、検討していきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP23K00569, JP23K25327 および国立国語研究所共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] 田中弥生. 修辞機能と脱文脈化の観点からの日本語談話分析. 博士論文. 東京大学, 2022.
- [2] C. Cloran. **Rhetorical units and decontextualisation: An enquiry into some relations of context, meaning and grammar.** PhD thesis, University of Nottingham, Nottingham, 1994.
- [3] C. Cloran. Contexts for learning. In Frances C, editor, **Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Processes**, pp. 31–65. Continuum International Publishing, London, 1999.
- [4] 佐野大樹. 日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1: 選択体系機能言語理論 (システムミック理論) における談話分析 (修辞機能編). https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/228720/34ec2728989b398c8dd30e659251320e?frame_id=486573, 2010.
- [5] 佐野大樹, 小磯花絵. 現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証 – 「書き言葉らしさ話し言葉らしさ」と脱文脈化言語 文脈化言語の関係 – . 機能言語学研究, Vol. 6, pp. 59–81, 2011.
- [6] 岩田純一, 佐々木正人, 石田勢津子, 落合幸子. 児童の心理学. 有斐閣, 東京, 1995.
- [7] 岡本夏木. ことばと発達. 岩波書店, 東京, 1985.
- [8] 田中弥生, 江口典子, 小磯花絵. 家庭での食事場面における親子会話の脱文脈度の観点からの分析. 言語資源ワークショップ発表論文集, 第 1 巻, pp. 329–339. 国立国語研究所, 2023.
- [9] 田中弥生, 小磯花絵. 家庭における子どもの談話の脱文脈度の観点からの分析. 言語資源ワークショップ発表論文集, 第 1 巻, pp. 419–430. 国立国語研究所, 2024.
- [10] 田中弥生, 佐尾ちとせ, 宮城信. 児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討. 言語処理学会 第 27 回年次大会 発表論文集, pp. 750–755, 2021.
- [11] 小磯花絵, 石本祐一, 居關友里子, 江口典子, 柏野和佳子, 川端良子, 田中真理子, 田中弥生, 西川賢哉. 『子ども版日本語日常会話コーパス』モニター版の構築. 言語処理学会第 31 回年次大会発表論文集, pp. 3525–3528, 2025.